

# 18 世紀ドイツの公共性考

## レッシングとハーバマス

渡 邊 直 樹

### はじめに

ハーバマスは『公共性の構造転換』(Strukturwandel der Öffentlichkeit: Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft, 1962)において、18 世紀ヨーロッパの市民社会に勃興したコミュニケーション空間を公共性あるいは公共圏 (Öffentlichkeit) と捉え、その構成員や構造、役割や影響、歴史の変遷等を分析し、公共性が有した普遍的性格を現代社会の、一種公共空間の規範モデルとして提起した。

18 世紀に勃興した市民階層が、近代以前の支配階層対被支配階層という二元的社会構造の間にコミュニケーション可能な社会空間を作り出し、そして、彼ら市民に共通の利益確保のための活動や議論が、つまり公共性を追究目的とした合意形成が社会変革を促したとハーバマスは分析し、この社会空間を公共圏あるいは公共性とよんだ。

一方、19 世紀以降になるとこの公共性の構造が転換を招来する。市民階級の力と支配階級の力・国家権力との間にコミュニケーションが可能になったとき、つまり、両者間の乖離が産業社会の労使関係や商品世界との等価関係により狭まったとき、前の時代に専ら市民のものであった公共空間の公共性が国家・支配階級によって再度占有され、むしろ彼らに好都合に操作される空間となってしまった、とハーバマスは分析する。

現代では、公共空間は政治的経済的影響力を及ぼすための操作対象空間と墮し、議論は私的に所有され利潤を目的として経営されている巧みなマスメディアによる広告機能の一翼を担う

役割にさえなってしまったと見る。ハーバマスは、この公共空間である「市民的」公共性の危機と諸個人の力によるその復権を唱えている。

そもそも公共性とは、「公共の関心事」や「共通の利害関心」の問題を議論するために集合する「私人」たちから成立するものである。近代ヨーロッパにおいて、公共性が影響力と現実性を有したのは、絶対主義国家と均衡を図るため「市民」とその市民的公共性が誕生したことによる。公共性とは公開性を原則として、市民の側からは国家の機能・活動を批判的に検証し、国家の側からは社会に対して責任を果たすという相互のコミュニケーション機能のメカニズムであった。

本稿は、この観点から 18 世紀ドイツの啓蒙主義者レッシング (Gotthold Ephraim Lessing, 1729-1791) の市民的営為のうちにハーバマスの文藝的公共性の合理的批判的討議モデルを検証しようとの試論である。

### I ハーバマスの課題

市民社会は非国家的、非産業的あるいは非市場的空間であり、いかなる束縛もうけることがない自由な意思に基づく結合体、すなわち結社・団体である。これら団体が政治的意思決定の言説空間となると、議論による合意形成が要求されるが、これら団体はある政治的意図のもとに統一的に動く組織的集団ではなく、本来的に市民フォーラムや市民運動、NPO (非営利の団体) であり、市民で構成される自律的団体でなければならない。これら団体が自由を保証された空間において、真理・真実を求めて

批判的に議論するとき初めて合意が形成される。この言説空間での議論・仲介は言語機能による。

文化的伝統の影響を受けながら作り上げられ、社会的約束・統合の一手段として受け入れられた媒体である言語が、支配や社会的権力を伝達する機能を果たしている現代では人と人とのコミュニケーションが物と物との物質的關係のように現れている。相互理解があったとしても、コミュニケーションが虚偽である可能性が存在する。現実の制度・枠組みとコミュニケーションの虚偽性の可能性が意識されることにより、よかれあしかれ、これまでの文化的伝統や社会制度、規範体系についての認識が影響を受ける。つまり、偽の合意と相互理解が強制され、現実の産業社会の技術的知識が生活世界の実践的意識と結合させられ、支配や社会的権力により組織された体制を正当化する。これが正常であるかのように思い込んだり、思い込まされたりする。こうした錯覚、欺瞞、偽善が社会の規範体系として強制力をもっていく。この構造を見抜く洞察力が要求されているのである。

錯覚、欺瞞、偽善は外的社会的強制力によるものだけではなく、内的個人的強制力との協働により生起するものであることを自覚する必要がある。この自覚によって初めてコミュニケーションの条件が整い、真の合意が形成され、伝統の見直しと批判が可能となり、錯覚、欺瞞、偽善からの解放が現実となる。ここに必須のものが、ハーバマスがいうところの「反省」(Reflexion)なのである。

生活関連の利害関心や潜在する現実の強制を洞察し、病理症状を認識し、批判可能にする理念とは「善」であるが、ハーバマスによれば、しかし、それは「言語とコミュニケーション行為という媒体において固定されてしまっている<sup>1)</sup>」その救済

の唯一可能な運動が「反省的態度」である。コミュニケーション能力をもつ話し手と聞き手とが、虚偽意識の強制から逃れるためには相互主体的なコミュニケーションが作り上げられなければならない。このことは「反省的態度」を徹底することによってのみ可能となる。理性を通した反省のみが強制からの解放的認識をもたらしてくれる。なぜならば、理性を獲得しようとする自己の意志によってしか理性は生まれて来ないからである。

ハーバマスは『理論と実践』(Theorie und Praxis, 1968)において次のように述べる。

ある特殊な経験、……すなわち見抜かれていないという理由で客観性が保持されている虚偽関係は批判的洞察により解放される。批判的理性はドグマ的偏見に対する分析力を有しているのである<sup>2)</sup>。

抑圧と支配とが交錯する思想や制度に対しては、根本的反省が対置されなければならないであろう。文化的発展史の解釈学的再構成がこの場合必要となる。この再構成を通して、目指すべき生活の理念、生活の再生産にとって価値あるもの、滋養となるものが明確化され、提示される。これがハーバマスのいうところの「社会進化」(soziale Evolution)の方向である<sup>3)</sup>。

カント(Immanuel Kant, 1724-1804)の『実践理性批判』(Kritik der praktischen Vernunft, 1788)に基づき、主観主義とか客観主義とかの両極に陥ることのない、認識による分別に支えられる利害関係は理性的批判力を保持し、認識的解放へと至る。人々は倒錯構造を強いる連関によって歪められた現実社会の認識と反省から、コミュニケーションに依拠しつつ解放と自己形成へと向かうことができる。

1 Jürgen Habermas: Zur Rekonstruktion des Historischen Materialismus, 1976. S.57f.

2 Jürgen Habermas: Theorie und Praxis, 1963. S.244.

3 Ebda.

カントは、理性の公的使用の自由について、私的使用と区別し、自分が所属する社会の利害や立場に拘束されることなく、公衆(Publikum)にむけて自分の意見を表明することであると述べ、自分の利益に反することに対する意見表明の絶対的自由を主張している。ハーバマスはこの自由を合意形成のため強く目的論的に方向付け、相互のコミュニケーション的自由の確保と合意とを優先したため、批判的方向が失われ差異化を抑圧した、との批判がある<sup>4</sup>。公共性は討議の空間において保証されるものであり、参加者の討議には合理的動機付けが要求される。合理性により、非合理的議論が退けられ、一定の合意が形成されていく。しかし、この合理性の基準が何か明らかでない以上、議論はすれ違い、討議はアポリアに陥ることになる。また、意思決定は妥協の産物とならざるを得ない。真理とは多様性・多元性を前提する以上、コミュニケーションは一つの合意に向けて収斂されてはならないのである。

このため、合理的合意が可能であるというハーバマスの考えを理解することが、カントの実践的理性へのアプローチを可能にする。たんに議論を媒介とする討論の規範的理念ではなく、討論を構成する前提条件のひとつがこのアプローチの方法であり、これにより合理的同意が可能であることを想定しなければならない。正当な理由の動機づけを基に自由で平等な人々の間でおこなわれる妥協、合理的合意あるいは同意の形態を追究していくと、参加者は合意の可能性への期待を抱きながら公共の議論を推進しなければならないことに気が付くはずである。

公共の場における対話としての討議モデルにおいては、私生活や私的価値と対立する公的規範や公共の利害関心は合意の意思形成過程に内

在的なものであって、外部から与えられるものではない。

ハーバマスの公共性における合意形成過程のこうした課題を顧慮しつつ、18世紀啓蒙主義時代のドイツ社会に多く誕生した「協会」や「結社」における議論と協議について具体的に検証していくこととしよう。

## II レッシングの闘い

18世紀末に人口16万9千人を数え多様な民族と文化とが混在した国際都市、ハーブスブルク帝国の首都ウィーンでは啓蒙的皇帝ヨーゼフ二世(Johseph der Zweite, 1741-1790)の統治政策において検閲制度の緩和と宮廷機能の縮小にみるべきものがあつた。ヨーゼフ二世は即位の翌年、1781年に「今後の出版物検閲の基本規程」

(Grund-Regeln zur Bestimmung einer ordentlichen künftigen Bücherzensur)を公布する。これにより、宗教的著作物に専権を有した教会の検閲がなくなったのみならず、「寛容令」が発布されたことにより、ルター派、カルヴァン派、正統派など非カトリック教徒やユダヤ教徒にさえ信仰の自由が保証されることになった。禁書目録が減ったばかりか、むしろこれまでの伝統的宗教書が禁書にさえなった。定期刊行物をはじめ、いかなる種類の冊子も印刷可能となり、宣伝用パンフレットさえ登場した。このことは、国家の主要な統治原理の一つであつた情報管理が、印刷物、通信、移動手段の展開によって、すでに統御不可能となった時代を映している。

ウィーン劇場を創設するなど、この地で啓蒙的諸施策の実践にふさわしい社会と文化の改革に主導的役割を果たしていたのがユダヤ人官吏ヨーゼフ・フォン・ゾネンフェルス(Joseph von Sonnenfels, 1731-1817)であつた。レッシングは、このウィーンを1769年と1775年に訪れている。初めて訪れた1769年の8月25日にベルリンの雑誌編集者・ニコライ(Friedrich

4 齋藤純一 『公共性』思考のフロンティア(岩波書店) 2007、35f.

Nicolai,1733-1811)宛てに次のような書簡を認めている。

あなた方の考えているベルリンの自由とは宗教について全く愚かなことばを広めるためだけのことです。……一度ベルリンでゾンネンフェルスがウィーンで行っているのと同様に……宮廷の偉ぶった連中に真実を言わせてごらん下さい。臣民の権利を擁護し、搾取と専制政治に声を大にして抗議する者を一人でもベルリンに登場させてごらん下さい。……そうすればヨーロッパ中で国民が最も奴隷のような国がどこか、すぐにもわかるでしょう<sup>5</sup>。

いわゆる啓蒙専制君主フリードリヒ二世(Friedrich der Zweite,1712-1786)支配のベルリンの執筆の自由とは名ばかりであって、自律的で批判的思考を促進するような文芸や哲学はいかなる形式のものであれ抑圧的であることを、宗教的に最も寛容であったベルリンも、それが政治とかかわるやいなや事情が一変し、弾圧が加えられる精神の奴隷状態にほかならないことを、社会の構成員である市民間のコミュニケーションが成立し得ないことを、レッシングはウィーンと対比し告発している。

一方、18世紀初め、プロイセンの州都ベルリンの人口は19万人を数え、ドイツ諸領邦で最大の都市であった。イギリスやオランダに遅れてようやく市民社会が勃興しつつあったこの街では多様な雑誌が発刊され、また団体が創設され情報の蒐集やコミュニケーションが行われ、市民の文化消費も活発化しつつあった。

哲学者カント(Immanuel Kant,1724-1804)は、フリードリヒ二世の啓蒙主義的諸施策に多

分の期待と自由と満足とを感じた。一方、一時、ベルリンに滞在し『ベルリン特許新聞』

(*Berlinische Privilegierte Zeitung*,1748-1761)の編集者でもあったレッシングがここに見出したものは、ヨーロッパで最も奴隷的な国家の重圧下にあったみせかけの自由でしかなかった。カントとレッシング、二人の啓蒙主義者にまったく正反対に意識された精神的雰囲気とは、カントにとってベルリンは確かに理性の私的使用としてヒューマニズムに基づく思索の場であったが、一方、生涯、社会のどこにも生活基盤をもつことがなかったレッシングにとっては、いわば表現の自由を担保する著作家としての批判精神において自己の生を実現できる市民的自由を獲得すべく闘わなければならない場にほかならなかった。それは必然的に専制体制を推進する官僚国家プロイセンとの決別を宣言することであった。それゆえ、レッシングは18世紀ドイツ社会において自由な立場で、自由に思索し、自由に行動しあらゆる分野において真理を追究するための著作活動を展開できた。そして、なによりも、レッシングが語りかける相手はハーバマスがいう公共性の基盤であるところの「公衆」であり、カントが言うところの理性の公的使用による議論を呼び覚ますものであった。

文芸分野をおもに批評対象とした『最新文学書簡』(*Briefe, die neueste Literatur betreffend*,1759-65)の批評子の一人であったレッシングは、劇や詩、翻訳や百科事典を含む多様な題材を取り上げ批評し、論争し、議論を促した。レッシングは、また、ハンブルク国民劇場の劇評家となり、後に『ハンブルク演劇論』(*Hamburgische Dramaturgie*,1767-69)としてまとめられる「劇評」において、劇の在り方・理論を機会に応じて表明した。その立場は、ギリシア・ローマ古典を理想としつつも市民の側に立って文芸の理論や歴史を追究し、なによりも市民的理性に訴えるものであった。ドイツ最

5 Gotthold Ephraim Lessing: Sämtlichen Schriften. Hrsg.v.Karl Lachmann u. besorgt durch F. Muncker. 23 Bde. Berlin-Leipzig 1886-1924. XVII, S.297f.



初の市民悲劇といわれる『ミス・サーラ・サンブソン』(Miss Sara Sampson, 1755)や『エミリア・ガロットィ』(Emilia Galotti, 1777)は、彼の理論の実践とも評される。

晩年、ヴォルフエンビュッテル図書館司書となったレッシングは、キリスト教ドグマの矛盾や世俗的聖職者の偽善を告発し、正統派聖職者たちを論争の場に引きずり込み、彼らの信仰的態度を糾した。聖書の歴史の合理性を論じた自然神学者ライマールス(Hermann Samuel Reimarus, 1694-1768)の秘匿の書を『一無名氏の断片』(Fragmente eines Unbekannten, 1774-78)として「ヴォルフエンビュッテル図書館報」に公表することにより、ハンブルクの正統派首席牧師ゲッツェ(Johann Melchior Goeze, 1717-1786)を神学論争に引きずりこみ、最終的にゲッツェをして大公の権力を持みにレッシングの言論を封じ込めた。しかし、この言論の抑圧は劇作『賢者ナータン』(Nathan der Weise, 1779)誕生の切掛けとなる。レッシングの一連の神学論争は、ただの御都合主義の自己主張のあらわれなどではなかった。それは伝統的概念の「白紙還元」をもって、あらたな思考のパラダイムを創造し、啓蒙精神そのものの担い手であろうとしたレッシングの闘争であるとともに、啓蒙主義と彼独自の思考形式の体系を公衆に公開することにほかならなかった。

レッシングが批評・論争・議論の場とした批評誌は、18世紀の市民社会の勃興を象徴する文化消費に寄与する情報提供という意味で、確かに力があった。しかし、レッシングが遡上にのせたユダヤ人の解放とユダヤ教の信仰的自由をはじめ、当時タブーであった宗教・神学批判、「協会」やフリーメーソン・ロッジにいたるまで、これら対象はドイツ社会と広くヨーロッパ社会が歴史的にうちに有していた矛盾を啓蒙の光の下に晒すことにほかならなかった。レッシングの批評は、文芸の枠を完全に逸

脱する社会性を有していたのである。

レッシングの啓蒙主義は、これらドイツ社会と歴史の諸矛盾を議論の場へ、自由な言説空間にもたらし、人間の生得の権利を要求するものであり、したがって彼個人の意見というよりも、必然的に社会的世論となるべき公共性を備えていた。つまり、彼の課題はすべて公共的議論にふさされるべき性格のものであった。レッシングの啓蒙主義の社会的性格は、18世紀中葉に至ってようやく誕生しつつあったドイツ諸都市の市民社会の公共性を求めた闘いであった。

ハイネ(Heinrich Heine, 1797-1856)は、レッシングの死後、半世紀以上経て、彼の批評家としての存在を高く評価した。

論争こそはわがレッシングの最大の楽しみだった。……忘却の淵に沈むという当然の運命を、彼との論争のおかげで免れた者の数は、一、二にとどまらない。……彼は相手の息の根を止めると同時に、相手に不滅の存在をも与えるのだ<sup>6</sup>。

また、フリードリヒ・シュレーゲル(Friedrich Schlegel, 1772-1829)は『レッシングについて』(Über Lessig,)において「『反ゲッツェ』(Anthi-Goeze, 1778)は……その全体において、哲学的精神や詩的精神、倫理性という点で、レッシングの著作中、第一級のものである<sup>7</sup>」と評した。レッシングにとって「論争は批判精神の糧となり、偏見や名声を絶えずふるいにかける、すなわち塗り固められた偽善を真理として固定させないようにする<sup>8</sup>」啓蒙主義の合理

6 Heinrich Heine: Sämtliche Werke. Band 8-1. Düsseldorffer Ausgabe. 1979. S.74.

7 Gotthold Ephraim Lessing. Hrsg. v. Gerhard und Sibylle Bauer. Darmstadt 1968, S.15.

8 Ebd.

主義精神に根差していた。レッシングは、公共性のうちに活動の基盤を有していた。そして、そうであったからこそ、論争相手や批評が歴史に名を留めることができたのである。

レッシングの多元的かつ平等主義的公共性は、この意味で国家と宗教との関係把握を課題とした。啓蒙主義ヨーロッパ社会の普遍的課題であったユダヤ人とユダヤ教は公共性の討議を媒介にして、平等と信仰の自由という社会的アイデンティティを獲得する必要があった。レッシングはすでに若い頃、その言説空間である創作において喜劇『ユダヤ人』(Die Juden, 1749)を書いてユダヤ人に対する不当な差別と偏見を告発し、ゲツツェとの神学論争において結末を宗教的寛容をテーマとする劇作『賢者ナータン』に仕立て上げたが、そのモデルは同い年であり、生涯、交誼を結んだ「明晰な頭脳と高貴な心をもつ<sup>9)</sup>」メンデルスゾーン(Moses Mendelssohn, 1729-86)だと言われる。

このユダヤ人哲学者メンデルスゾーンは、レッシングが「文字(聖書)は精神ではなく、精神は宗教ではない」と宗教的真理を人間の信仰心に求めたのと同様に、宗教が人間の内的精神を強制するものではないことを主張した。絶えず「国家のなかの国家の創造」を企んでいると監視され、閉鎖的地域に追いやられていたユダヤ人にとって、自律的人間として語りかけるべき公衆も、それに応えてくれる公共空間も存在しなかった。メンデルスゾーンの信念は宗教と国家との分離、道徳と法との分離、教会と聖職者との分離、すなわち宗教の脱政治化にユダヤ人が精神的自由を獲得できる方途を追究するものであった。

多くのクラブや団体から構成されたドイツ人市民社会がユダヤ人コミュニティを受け入れる多元的平等的公共空間であるためには、

ハーバマスが合意形成にいたる道筋を示したように、言説の公共空間から絶対的真理は排除されなければならないであろう。なぜならば、この空間は言説が豊かであること、いわば多様な意見の空間であることが前提であり真理はユダヤ人だけのもの、一つのものであってはならない。言語は人間と人間とが公共空間において意見交換を行うツールの機能を果たすものであり、公共性とは真理ではなく意見なのである。意見は他者に向かい語るもので、他者との違いを明らかにすることであるからである。

ナチスに追われ、アメリカ合衆国に亡命したユダヤ人政治思想家ハンナ・アーレント(Hanna Arendt, 1906-75)によれば、言説は近代に至って、人間の内にあるもの、欲望や願望を伝達するためだけの手段となってしまった、という。アーレントにとって、ナチスによるホロコースト体験は思考と生の根源であった。死の恐怖と隣り合わせであったアーレントの「生」とは、それは、他者によって自己の存在のリアリティが与えられる「生」ではなく、「真に人間的な生を生きるうえで本質的な事柄が奪われている<sup>10)</sup>」、いわばだれによっても存在証明が不可能であったユダヤ人としての私的「生」にはかならなかった。「他者によって見られ、聞かれるという経験がない<sup>11)</sup>」とは、他者が存在しないことであり、他の視点から私的生活をする人は現れることがなく、このことは、私的生活をする人が存在しないも同然である。私的生活をする人とはユダヤ人のことであろうし、ユダヤ人こそが公共性・空間を奪われた人たちであった。

アーレントは、啓蒙主義者レッシングの活動を記念する「レッシング賞」を受賞した際、その講演の最後をレッシングの有名なことば「真理は神のみが所有し、人間にとってそこにい

9 Moses Mendelssohn: Sämtliche Werke. Ausgabe in Einem Band als National-Denkmal. Wien 1838, S.1018.

10 ハンナ・アーレント『人間の条件』志水速雄訳、ちくま学芸文庫、1994、87-88頁。

11 同所。

たる努力の過程こそが重要である<sup>12</sup>」で締めくくった。ユダヤ人メンデルスゾーンにとってキリスト教やイスラム教に宗教的真理を承認することが困難であるのと同様に、宗教における啓示的真理と歴史的真理との間を認識論的に架橋することは不可能であり、真理は神のみが所有できるものなのである。

フッサール (Edmund Gustav Albrecht Husserl, 1859-1938) とハイデッガー (Martin Heidegger, 1889-1976) の現象学の系譜に連なるアーレントは、人間の根本的経験を擬似的に想起し、政治の根本的意味を共同行動の場である公共空間の概念に求めることにおいて、近代でも悲劇を重ねたユダヤ人と信仰の自由の問題を改めて提起しようとしたのであろうか。

### Ⅲ レッシングとフリーメーソン

ドイツでコミュニケーションや討論の場としていわゆる「協会」(Gesellschaft, Societät)と名がつく多くの、それもさまざまな種類の団体が登場するのは17世紀にはいつてからである。それらはルネッサンスのヒューマニズムを浸透させることを目的に、言語や文芸を介して社会・文化の変革を促した。大学での講義やスコラ学に使用される言語がラテン語であり、それが閉鎖的知識階級を形成していた時代を考慮すると、市民階層が主体的に知識を得るためにはこうした団体による啓蒙が必要であった。つまり、言語を知識修得の手段とみなせば、「協会」は意識の高い上流の教養ある知識人の、いわば言説空間となるし、また、ドイツ語教育あるいは文化消費という観点に重点をおくと、公衆のための教養の修得・教育の「言説空間」となる。

「協会」は、1760年から90年にかけてドイツとスイスのドイツ語圏地域に急速に広ま

る。7年戦争による愛国的雰囲気の高まりや経済的豊かさがこれらの設立と無関係ではない。この会員には商業により富を得て裕福になった商人たちが多くいた。ここには、支配者たちに対して自分たちの利益を確保するための法の整備と課税の軽減を要求して闘った歴史がみとられる。会員たちは共通の幸福と利益を追求目的とした一方で、個別の細部にわたる項目についても議論した記録が遺る。むしろ狭い意味で実践的知識と身近な問題、自己利益に目を向けたと言ってよい。

商業資本が蓄積され始めた18世紀においては実際の知識が技術革新を生み、開放的市民的雰囲気を醸成し、王侯貴族階層とは異なる市民的徳や公共への奉仕、慣習に基づく行動や自己利益が優先された。技能習得のための実践的学校の設置や流通システムの整備の記録があり、貧困や健康など実生活の課題が会議のテーマとなった。法や政治への関心は、改革の方向を指示した。愛国的雰囲気は「協会」の団結の象徴であり、ドイツ市民階級のアイデンティティとなった、それは統一国家として存在しなかった18世紀ドイツの市民道徳と市民意思のあらわれであり、啓蒙主義の基本理念の反映でもあった。

フリーメーソン・ロッジも存在したライプツィヒにおける「愛国協会」の1764年から89年の間の統計を例にとれば、会員数281名、この内官吏41名、大学教授、医者、聖職者ら知識人18名、商人13名、美術工芸家11名、地主11名、貴族184名である。ドイツ一般の平均会員数が200人から500人で、多様な階層、年齢、職業から構成され、重複登録や短期間での移動によりその比率に多少の相違があったとしても、ドイツ全体で推計4000人から5000人程度の会員がいたといわれる<sup>13</sup>。そして、フリー

12 Gotthold Ephraim Lessing: Werke. Hrsg. v. Herbert G. Göpfert. München 1979. 8Bde, S.33.

13 Richard van Dülmen: The Society of the Enlightenment. Great Britain. 1992, S.68.

メーソン・ロッジのように絶対的権威としての「憲章」をもたない「協会」員を結び付けるものは、親密な友情や愛国的感情であり、相互信頼と知的交流であった。市民の出自が半数を占めた理由がここにある。

「協会」は17世紀には官僚や貴族が多数であったが、18世紀には権利を得て義務を果たす市民階層の人々が増加した事実は、ドイツ社会が確実に市民中心の社会へと移行していたことを示している。このことは「協会」の活動に認められる。「協会」のなかでは平等主義が原則であり、すべての会員に言論の自由が保証され、個人の権利が尊重された。「協会」は一般に機関誌を発行し、研究成果・知識・議論は公表された。これにより、一般公衆も実際の知識を共有することができた。

統一国家として存在し得なかったドイツは、「協会」についてもそれなりの多様な方向が見てとられる。ラテン語やフランス語ではなく、ドイツ語と文芸に目をむけたことからドイツ人のアイデンティティが「言語協会」(Sprachgesellschaft)を生んだ。学術研究機関としての「アカデミー」(Akademie)は、フランスとの比較においてドイツ固有の研究分野と思想とを発展させた。商工業者や資本家層が領邦あるいは国家に対して、討議を介し合意を得た共通利益のための施策の実行を迫ることで「愛国協会」(Patriotische Gesellschaft)が少なからず社会変革の先駆となった。

18世紀ドイツにおいては、平等と文化の多様性を前提する社会の実現が公共性の議論を促した。フランスの貴族社会の女性の集まりであるサロンやイギリスに範をとったクラブなど、市民的公共性を追求した「協会」が確かに存在した一方で、政治や宗教の秘密結社も存在した。この両者の根本的違いは公開と閉鎖、公共性と秘密主義にあった。その歴史が明確ではないフリーメーソン・ロッジは、後者に属す

る。フリーメーソン・ロッジは神秘的で秘密に満ちた団体であり、その実態を暴露した者もないし、それにかんする著述も存在しない。むしろ実態が不明であるにもかかわらず歴史的普遍妥当の真理が存続したからこそ、時代の権力や支配から免れ独立と活動を維持し得たのであろう。啓蒙主義精神が汎ヨーロッパ的広がりをもっていたのと同様に、フリーメーソン・ロッジは国際的連帯を特徴としていた。その役割と活動は、イギリス、フランスやロシアなどの国々において、ウィーン、ハンブルクやベルリンなどの都市において異なっていたが、「協会」以上に組織と人間関係の世俗化が徹底していた。絶対主義国家における秘密結社は一般に私的な同士の集まりであったが、啓蒙主義時代のそれは市民の解放と公共の利益を追求する民主主義的組織に準ずるものであった<sup>14</sup>。

レッシングは、事実1771年10月14日にハンブルクのフリーメーソン・ロッジ〈三本の棕櫚の木〉(Zu den drei Rosen)に正式に入会が認められている。会員は「王様や伯爵、貴族や官僚、参事会員であれ、蹄鉄工であれ、商人や芸術家であれ、ロッジではみな階級の区別なく互におしゃべりし、実際にみなが同じ人間であった<sup>15</sup>。」そして、対話を行う人たちが対等に協議することができる公共性が存在するだけでは十分ではなかった。本来、ありえないことではあるが、ロッジが内包している社会的不平等が解消され、平等が前提されなければならなかった。たとえば、会員の出自は官吏、商人、世襲貴族、大学教授、法律家、医者、建築家、ぶどう酒職人、聖職者、画家、時計職人、銀行家、本屋、専門的職人等多様であり、ゲーテ (Johann Wolfgang Goethe, 1743-1832) やフィヒテ (Johann Gottlieb Fichte, 1762-1814)、ヴィーラント (Christoph

14 Alexander Altmann: Moses Mendelssohn. A Bibliographical Study. London 1973, p.36.

15 Lessing. Werke 8 Bd. S.478.



Martin Wieland,1733-1813) やモーリッツ (Karl Philipp Moritz,1756-1793) ら文人、モーツァルト (Eoflgang Amadeus Mozart,1756-1791) ら音楽家も会員であったことが知られている。

フリーメーソンたちは憲章に従い連帯した。秘密とか神秘とかはネガティブなイメージではなく、組織の独立と自由を維持するポジティブな根拠となった。フリーメーソン・ロッジに属する者は、現実社会と日常生活から離れたところで、自己の意思に忠実であることが義務であり、自己の意思決定が最高の規範であった。信仰の自由が尊重され、神学的議論や政治的問題は分裂や不和を招き、憲章に沿わないものとして回避されるのが原則であった。議論は理性と合理的原理に基づき、無作法で非道徳的言動は禁止されていた。フリーメーソン・ロッジと現実社会は全く別の世界であることが会員の共通認識であり、会員の行為によってのみその実態が推測された。

レッシングはアメリカ合衆国の独立戦争時に『エルンストとファルク、フリーメーソンのための対話』(Ernst und Falk,Gespräch für Freimaurer,1766-1768) を書いた。そして、この二人の登場人物がフリーメーソンという一般には実態不明の団体について、その過去と未来にわたる存在意義と理想とを話し合うことにおいて、作品は一つの国家論あるいは社会論にまで高まっている。アメリカ合衆国の独立宣言とは無縁ではあるまい。

『エルンストとファルク、フリーメーソンのための対話』は二部構成で五つの対話から成立している。三つの対話から成る一部は国家・社会・宗教の違いを克服するフリーメーソンの理想の姿を、二つの対話から成る二部はこの役割を実現し得ない現状を描き出している。レッシングはこれを批評とか、論文とか書簡とかの形式ではなく、対話の形式に依った。哲学的対話や書簡体には批評や論文としての歴史的伝統が

あるが、むしろレッシングは劇作家として、公衆の面前に舞台・空間を設定し演じられる劇行為を利用してフリーメーソンの存在を介して国家のあり方を論じている。

レッシングにとって「フリーメーソンが何であり、なぜそれが存在するのか、いつどこではじまったのか、それがどのようにしてなぜ強力になったり、弱体化したりしたのか<sup>16</sup>」という歴史的理解が必要であった。このことは、統治者の国家と市民の社会との間にある乖離についての研究でもあった。

第二対話の市民社会と国家にかんするエルンストとファルク、二人の対話を聞こう。フリーメーソンであるファルクがロッジの歴史的役割をたどりつつエルンストに入会を勧める。エルンストは、疑問をいだきつつも、この役割に理解を示し、最終的に入会を承諾する。

ファルク：

君は市民社会をどう考える。

エルンスト：

非常によいものだと思う。

ファルク：

争いごとはない。しかし、君はそれが目的だと考えるかい。それとも手段だと考えるかい。

エルンスト：

わたしには君が考えていることがわからない。

ファルク：

人類は国家のために創られていると考えるかい。それとも国家が人類のために創られていると考えるかい。

エルンスト：

前者を主張する者もいるが、後者の方がより真実であろう<sup>17</sup>。

16 Lessing. Werke, 8 Bd, a.a.O.,S.458f.

二人は市民社会が公共性を代弁するものとみなし、国家との関係性を論じているが、現実の市民社会と国境あるいは枠組みを前提する国家とに置き換えることができるであろう。市民社会優先の考えによると、国家が市民社会の幸福を実現するための枠組みに過ぎないこと、国家優先は専制体制そのものであることを強調している。

ファルク：

わたしもそう思う。……

国家が人間と一体化することにより、個々の人間がよりよく、より確かに幸福を享受できる。国家の構成員一人一人の幸福が国家の幸福となる。……構成員がほんのわずかであれ我慢をしたり、我慢をしなければならないような幸福は専制のごまかしでしかない<sup>18</sup>。

フリーメイソンが市民社会の代弁であること、国家が現実社会・プロイセンの反映であると解釈できるし、人間個人の幸福が国家を超えて優先される。「市民生活やあらゆる国家組織は人間が幸福になるための手段に過ぎない<sup>19</sup>。」

ファルクが語るところ、国家と市民との共存とは公共性・公共空間の存在であり、そこでの議論を踏まえた合意形成が社会的正義を実現する方法であることと同義であろう。

ドイツ啓蒙主義時代の社会構造を分析したコゼレク (Reinhard Koselleck) は『批評と危機。市民社会の病因研究』において、国家と社会の敵対関係や政治原理と市民道徳・秩序との分離が構造的特徴として存在していたことを明らかにしている<sup>20</sup>。レッシングの『エルンストとファルク。フリーメイソンのための対話』をプロイセン国家のアナロジーと見てよければ、ハーバマスの公共性の合理的批判的討議モデルの原型をここに読みとることができるのではなかろうか。

## むすびにかえて

ハーバマスが『公共性の構造転換』において、公共性の起源が18世紀ヨーロッパ近代の市民社会の勃興にあること、その構成員の共通利益が社会正義であること、そしてそれは構成員の合理的議論による合意形成の結果であるとしてその討議モデルを明らかにした。

公共性は一方において、政治的支配を合理化する制度のメカニズムであり、他方、討論を媒介とする相互コミュニケーションのメカニズムでもある。公共の課題をめぐる何ら制約のない合理的議論の理想を示すものである。議論は参加者すべてに開放され、すべての参加者が関心をもつことができるものであって、単に私利利害関心は承認されない。身分の上下もなく、対等関係において議論が行われ、最終的には共通善をめぐる同意という、いわば世論に集約されるのである。しかし、事実は社会と国家との分離が曖昧になり、市民以外の階層の干渉により、市民的公共性は個別の利益集団に分極化し、私利利益の妥協が共通善にとってかわることになった。

現代のグローバル社会は、益々多文化的となり、多様な価値観と規範を有する集団が混在している。これら集団が参加する多元的な公共の舞台を前提して合意形成をめざさなければならないとすれば、多元的公共性が存在しなければならない。結論も一つではあり得ないであら

17 Ebd., S.453.

18 Ebd., S.459.

19 Ebd.,

20 Reinhard Koselleck: Kritik und Krise. Eine Studie zur Pathogenese der bürgerlichen Welt. Freiburg/München 1959. Neudruck. Frankfurt am Main 1973, S.55f.

う。しかし、合意形成を目的とするならば、議論への参加者全員が対等にかつ文化的差異の限界を超えて合理的協議を行い合意に達する価値観や規範を共有する必要があるだろう。

真理とは確かに存在し、絶対的基準であるとしても、それは誰のものでもなく、また誰かによって確定されるものでもない。つまり、そこに至る過程、合意形成のための議論・討議が尊重されなければならないとすれば、18世紀ドイツの啓蒙主義者レッシングの作家としての活動が改めて想起されてよい。

劇作家・批評家・神学者・哲学者・文献学者として、しかし生活基盤を社会にもたない「自由」な作家という意味で、換言すればすべての人間に解放され、接近可能な「公共性」に属し、「公共性」を代弁し、公衆をコミュニケーションの相手としたのがレッシングにはなかった。

翻って現在、SNS というメディアが怪物のように跋扈する時代において果たして公共性とは存在しうるのだろうか。